

What ISIT?

ISIT

ISIT: Institute of Systems & Information Technologies/KYUSHU

ISITの研究交流活動!

重度聴覚障害児の自立支援に携わる人たちを中心とした研究会の紹介

聴覚に障害をもった子供達が自立した生活が出来るように、様々な角度から支援をする人たちの集まりがあります。「筑後地区・きこえと補聴に関する研究会」は、平成5年3月に福岡県立久留米聾学校の教員有志により設立されました。

現在は、筑後地域だけでなく九州全域から、聾学校・ことばの教室・難聴学級の教員などの教育関係者、医師・言語聴覚士などの医療関係者、大学の研究者、保健婦・療育施設職員などの福祉関係者、補聴器メーカーの技術営業者など、総勢60名にも及ぶ多様な人々が集まり、人的ネットワークに基づく一つのコミュニティを形成しています。月に一度のペースで定例集會を持ち、それぞれの専門分野の紹介や実践報告を行うことで、会員が共に学び合う形態を採っています。また、それぞれが抱えている問題を持ち寄り、聴覚障害児の自立を支援するためのよりよい方法を見出そうとしています。



研究会で発表する勝瀬研究員

現在、ISITから勝瀬研究員(第三研究室)がこの研究会に参加し、聴覚障害児教育の現状、聴覚障害児をとり巻く様々な問題について学んでいます。さらに、聾学校の授業見学等も行いながら、聴覚障害児の効率的な学習にマルチメディア技術をうまく活用できないか、さらに学習効果を客観的に評価する方法などについて検討しています。



ごあいさつ 理事長 石川 敬一

今年の注目すべき事に、百道における「システムLSI総合開発センター(仮称)の開設」があります。システムLSIの産学官連携による研究開発やベンチャー企業の設計開発支援を目的とする施設で、秋に竣工され具体的に展開し始めます。このような研究開発施設は、福岡の産学官連携による研究開発やベンチャー支援・育成を進めるうえで重要な役割を果たし、頭脳集積や企業集積が益々活発化していくことが期待されます。

今春4月に国立大学は法人としてスタートしますが、ISITは今後も大学やその他研究機関などとの連携・協力関係を更に密にし、独自色を生かした研究活動を続けて参ります。また、現在盛んに言われています来るべきユビキタス・ネットワーク社会を見据えた時、情報セキュリティの問題は重要で、今後の研究テーマの一つとして取り扱っていきたいと考えています。

知的財産について、昨年「知的財産活用アドバイザー」を設置しました。本年は産学連携による事業化を推進する上で、知的財産の取り扱いについても具体的な提案を積極的に行っていきたいと考えています。

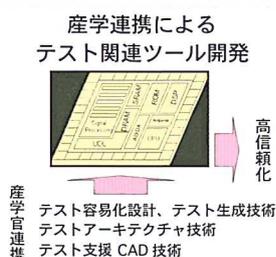
景気回復の兆しが見え始め、科学技術振興においても構造的な改革が進んでいる今、「何が必要なのか」、「何を行わなければいけないのか」、「これでいいのか」を常に問いかけながら、従来にも増して積極的な事業展開を図ってまいりたいと思っております。これまでと同様のご支援、ご協力をいただきますようお願いいたします。

システムLSIのテストコスト低減を 指向した産学官共同の研究開発

今回は、ベンチャー企業である(株)システム・ジェイディーを中心として行われている「システムLSIのテストコスト低減を指向したテスト技術の研究開発」を紹介します。

現在、情報家電(携帯電話、TVゲーム、遠隔監視・操作可能な家電、他)や自動車等に搭載されているシステムLSIは、今後、個人情報や人命に関わるシステムへの組み込みが期待され、その信頼性が、より重要になってきています。それを保証するための必要不可欠な技術として「テスト技術」があります。一方、システムLSIに搭載する回路の規模増大と複雑化から、製造コストに占めるテストの割合は増加しており、従来のテスト方法より短時間(=低コスト)で、且つ高品質なテストを実現する手法の確立が望まれています。

本研究開発は、システムLSIのテストに特化したベンチャー企業である(株)システム・ジェイディーの伊達博社長が産学官共同で立ち上げ、福岡県の平成15年度システムLSIフロンティア創出事業に応募し、採択されたものです。平成17年3月末まで開発が進められます。システムLSIのチップ製作に掛かる費用のうち、テストにかかるコストがどのような構成になっているかを、SoC(System on a Chip)やSiP(System in a Package)といったシステムLSIのタイプ別に調査し、テストコストに関する尺度を策定し、そのテストコストを低減するためのテスト戦略を提示するCAD(Computer-Aided Design)ツールを開発します。主な技術としては以下のとおりです。



- ・「テスト容易化設計技術」…システムLSIを設計する際にその製造時の不良を検出しやすくするような回路構造を実現するための技術
 - ・「テストパターン生成技術」…テストを行う際に、不良を検出するためのパターン(テストパターン)を自動生成するための技術
 - ・「テスト支援CAD技術」…テストに関する戦略策定を支援するためのソフトウェア技術
- ISITからも杉原研究員(第一研究室)が参画し、システムLSIのテストコストを削減するためのテスト設計の研究に携わっています。また、「テスト容易化設計技術」の研究として日本大学の細川助教授、広島市立大学の井上助教授、さらに「テスト生成技術」の研究として九州工業大学の梶原教授が参画しています。

半導体関連企業は、本研究開発の成果であるテスト支援CADツールを導入することによって、テストにかかるコストを低減でき、「チップコスト」や「出荷後の回収リスク」の低減を実現できます。

Report 1

第19回技術セミナー

<平成15年11月19日>

～これからのユビキタス・ネットワーク社会を支えるセキュリティ技術～

「暗号化技術の最新動向とその活用事例」

九州大学大学院 システム情報科学研究院 教授 櫻井 幸一 氏



最近の10年で標準化の進展などにより情報セキュリティ(暗号技術)に対する信用と理解が急速に深まりました。標準化の国際的組織であるISO(国際標準化機構)やIEC(国際電気標準化会議)において、経営資源(情報・システム・人など)のセキュリティマネジメントを遂行するためのガイドラインとして、「ISO17799」という国際標準規格を取り決めています。情報セキュリティを業務とする企業などにとって、今後この標準規格を取得しているかどうか重要になってきます。また、IT製品の開発に関連する生産物(設計書・プログラムなど)を評価する国際標準規格として「ISO15408」があります。ITセキュリティ製品やシステムを調達する際は、この標準規格の取得を条件とすることが重要です。逆に入札に参加する場合にはこの標準規格の取得を参加の条件としてくることも考えられますので、注目すべき標準です。

Report 2

第43回定期交流会

<平成15年12月15日>

「オープンソースソフトウェアの現状とコミュニティ支援」

OSDLジャパン ラボディレクタ 高澤 真治 氏



20年近いオープンソースの開発や普及の面で重要な役割を果たしてきたのがコミュニティと呼ばれる個人や団体です。最近では企業の支援のもとで活動しているNPO(非営利団体)のような団体がその代表です。従来のソフトウェア製品の流通から言うと、メカ側とエンドユーザーの担当者とは遠い位置にあります。オープンソースのコミュニティはこの間を埋めて、ユーザーの声が開発者へフィードバックしやすくする役割を果たします。コミュニティを支援する企業のメリットとして、OS(オペレーティングシステム)などの共通部分はオープンソースを利用することにより、開発に関わる負担やコストの削減またメンテナンス負担の削減が図られるということが挙げられます。

「ISITのこれまでの活動と今後の展開について」

牛島 本日はお忙しいところ、お集まり下さいましてありがとうございました。ISITが発足しましたのは1995年12月で、約2ヶ月後で満8年になります。最初の5年は長田先生が所長を務められまして、この研究所の基礎を作っていただきました。2001年4月から私が所長を勤めまして、早いもので長田先生が勤められた5年の半分を過ぎてしまいました。今回はこの8年間のISITの活動がどうだったのかをご報告したいと思います。8年間と言っても一応平成14年3月末までの約7年間の総括をして、その後、短中期目標を立てこれからどうするかということをご報告したいと考えています。



牛島 和夫 所長

7年間に何をやったか、つまりどういうアウトプットを出したかというのが一つあるかと思いますが、ただ単にアウトプットがあったというだけではあまり意味がありません。やはりISITが何故設立されたのか、どういうことが求められていたのかという視点でその結果

を整理してみたらどうなのか。つまり何ができて何ができなかったのか、またその設立の目的とは全然無関係なところでこんなことまでできてしまったということもあるかも知れませんが、それをそれぞれ我々なりに評価してみました。その評価が正当なものか、いやそれはちょっと筋違いではないか、というようなことを先生方に色々ご批判いただければ幸いです。今回も忌憚のないご意見を賜りますようお願い致します。

<ISITの目的、役割>

ISITの目的及び事業 (寄付行為)

【目的】

アジア太平洋を中心とした国際的な産学官の協調の下で、システム情報技術に関する研究開発、内外関係機関との交流及び協力、コンサルティング、情報の収集及び提供、人材育成などを行うことにより、地域の情報関連企業の技術力・研究開発力の向上及び情報科学・技術の発展と新文化の創造を図り、もって九州地域における情報産業の振興と経済社会の発展に資する。

■ システム情報技術：コンピュータを活用して既存の社会システムを再構築し、円滑に運用するために必要となるシステム化技術及びその基盤となる情報技術

【事業】

九州地域におけるシステム情報技術に関する以下の事業を行なう。

- (1) 研究開発
- (2) 内外関係機関との交流及び協力
- (3) コンサルティング
- (4) 情報の収集及び提供
- (5) 人材育成
- (6) その他、本財団の目的を達成するために必要な事業

森光 ISITの目的および事業の中身を私どもなりに整理する必要があります。さらに、仕事をする以上は必ずお客さんがいるわけで、そういう人達がどういことを求めているのかということをもっと認識し、把握しなければいけません。そこで、ISITでこういことではないかということ整理してみました。これは常に検証し、改定する必要があると考えています。

ISITに求められる役割

- (1) 情報関連企業
 - ・プロジェクト型研究などによる技術移転や研究開発力の向上
 - ・人材育成
 - ・研究者、技術者の交流の場
- (2) 大学
 - ・プロジェクト事業や実証実験の推進などISIT仲介とした研究成果の企業、社会への還元
 - ・産業界との交流および問題解決型研究開発の実体験
 - ・快適に整備（設備、人材）された研究環境
- (3) 福岡市・一般市民
 - ・情報関連産業の振興や雇用拡大に繋がる研究開発
 - ・福岡市及び地域社会の情報化の支援
 - ・国際交流
 - ・福岡市のイメージアップ

三井 ISITで出来た研究成果を事業化するというのがISITのミッションではなかったのですか。そこで出てきた成果をただ単にアウトプットとして出すだけではなくて、そういう成果を事業化するというのを頭に置いておかれたところが大学と違うところだと思います。例えば養魚場で稚魚の数を計測するシステム(本紙2003 vol.28 夏号参照)がありましたが、あのようなシステムを企業に任せて、使い物にならない役に立たないと判断したら使わなくて良いというスタンスなのか、それとも一生懸命それを企業化して役に立つところまでメーカーなどを指導していくスタンスなのか。

森光 事業化はやりませんということではなくて、事業化のやり方として、企業と一緒に共同研究することで企業の技術力が向上して事業化につながるということを狙っています。そういう意味で本格的な事業活動は企業が行います。具体的な各事業内容で言うと、プロジェクト型研究は大学や企業との共同研究をやって新たな事業や雇用創出が起こることを目指しています。受託研究はISITの技術を企業に移転することで事業化に貢献するというスタンスを取っています。また、そういうことを活発に行うためには普段から定常型研究で高いレベルを維持することが重要と考えています。

各事業の内容とその目的

- (1) 研究開発
 - ・定常型研究 プロジェクト型研究、受託研究の呼び水、学術分野への貢献
 - ・プロジェクト型研究 事業化及び雇用創出を目指した大学や企業との共同研究
 - ・受託研究 ISITの技術資産による技術普及
- (2) 内外研究機関との交流及び協力
 - 先端技術情報の提供と研究者相互の交流の場の提供、地域間の連携
- (3) コンサルティング 企業や自治体の技術的問題解決と現場ニーズの把握
- (4) 情報の収集及び提供 ISITの目的・活動の広報、技術者などの啓蒙
- (5) 人材育成 地域の情報技術者の育成
- (6) その他、本財団の目的を達成するために必要な事業 学会活動支援等

諏訪 事業化については、ISITが設立された8年前は無理だったと思います。つまり設立当初の社会情勢では、公的機関が事業化をやっていると民業圧迫という意見があり、難しいところがありました。しかしここ数年でそのような考え方は物凄く変わりました。

長田 設立当初、事業化については明確には謳ってなかったと思います。何かしら曖昧な形で技術研究の成果を地域の産業に何らかの形で貢献すればいいという漠然としたものでした。



吉田 将氏

吉田 大学も変化してきており、産学連携などにより事業化の機能を持つようになってきていますが、「情報産業の振興」といったものは、大学では無理であると思います。ISITはこれをどのようなビジョンで進めるのか、戦略的なものを議論する必要があると思います。

杉野 80年代に日本が非常に良い製品を作り成功したのは、プロセスのイノベーションによるものです。プロセスを改善して安く良い製品を作る。メーカーが最も得意とするところですよ。

次の90年代に出てきたのが、それまでの安く良い製品を作ることから、どんなものを作るのかという市場のニーズを探すことで、アメリカがそれで成功しました。

次に出てきたのが、MIT(マサチューセッツ工科大学)が出した論文で、いわゆるエクスペリエンス・イノベーション(Experience Innovation)という考え方です。技術の改善でもなく市場のニーズでもない、両方を合わせて皆でテクノロジーを使っていく間に次の価値あるものが出てくるという考え方です。



杉野 昇氏

まさしくそういう考え方と言うとISITは8年ぐらい前からそこを狙っていたと言うことが出来ると思います。ISITはハードを作ることにはできないし、あるいは新製品を考え出すことだと全部はできません。それを合わせて実証実験などをして、一つずつそれを現実の世の中に溶け込ませていく。ISITの目的

がこういうところにあるとすれば、その方向性はMITが一番力を入れているエクスペリエンス・イノベーションという新しい考え方に合っていると思います。

吉田 特殊法人や許認可法人に対する市民、世論の見方が厳しくなっている中で、ISITの活動や役割を見直し、きちんと説明できるようにする必要があります。



諏訪 基氏

諏訪 ここ数年間、産業技術に関連した取り組み方の意識、世の中の認識が変わってきています。大学に対する期待も変わってきて、公的機関も変わってきています。そのときに例えば、ISITはその寄付行為や設立の趣旨に沿って運営してきたと主張するのはわかりませんが、世間の常識が変わってきている中

でその趣旨がずれてきているのではないのでしょうか。そこを先取りして整理する必要があるのではないのでしょうか。



牛島 意図として、設立の趣旨で評価してみても良かった悪かったと言うつもりではありません。例えばそれで一旦評価してみて、それはやはり先ほど仰った世間の常識からずれてきているのではないかという言葉で実は踏み込みたいつもりです。

7年間の総括を始めた時は、アウトプットだけ列挙した感じになりました。それをある意味でこれはいい、これはどうかということ議論していましたが、しかし評価の尺度がないから、とにかく最初の設立の趣旨を物差しにしてみようと思ったわけです。そうするとその物差しで測れないものも当然出てくる訳で、そこに気づくことが大事であると感じています。

<事業化への取組方について>

三井 ISITのこれまでの成果のうち、事業化できるものが少なからずあると思います。年に1,2回、ISITの成果を外部に公開して事業化パートナーを探る仕組みを作ってはどうかでしょうか。

森光 地場企業に事業化させたいというプロジェクトの思惑があったり、プロジェクト終了後に新たな開発課題がでてきたりして、事業化までに時間がかかっています。プロジェクト提案では、特に大学の先生方はご自身の専門以外の技術者や研究者と分野横断的な連携を組むと思わぬ成果が生まれることがあります。

三井 分野横断的なプロジェクトの有効性は分かりませんが、製品化を目指すならば、異分野の専門家・技術者を組み合わせるだけでなく、ビジネス的な専門家を入れるような体制がいいのではないのでしょうか。

やはりこの8年間の成果の中で、事業化できるようなもの、ビジネス化できるようなものが出てきていると思います。ISITで事業化するという事は難しいのであれば、年に1回か半年に1回研究成果を見て、スピンアウトしてどこかの企業にわたす、あるいはベンチャーにする。そういうことを組織的に行えば少しずつ成果が上がってくると思いますが、具体的に考えて頂きたいと思います。

<知的財産の取組について>

三井 企業からの受託研究についても、ISITがいろいろな企業にアイデアを出して、そのアイデアが生きて事業が成功した場合には、ライセンス料やロイヤリティ収入が入るような形が望ましいと思います。

森光 本年度の受託研究ではそのような事例も出てきていますので、弁理士の方にアドバイザー(本紙2003vol.29夏号参照)になっていただいて、受託でもロイヤリティを要求できるやり方を検討しています。

[研究顧問] (出席者五十音順)

- ・杉野 昇 株式会社三菱総合研究所 社友 兼 日本大学 教授
- ・諏訪 基 国立身体障害者リハビリテーションセンター 研究所福祉機器開発部長
- ・長田 正 福岡市 顧問 (IT戦略担当)
- ・三井 信雄 イグナイトグループ マネージングパートナー
- ・吉田 将 九州芸術工科大学 前学長

<人材に関する課題について>

森光 ISITの研究員は、何年か経過してISITを辞めて大学や企業など色々な所にキャリアアップしています。辞めてそのすぐ後に、ふさわしい新しい人材を確保するというのが課題としてあります。

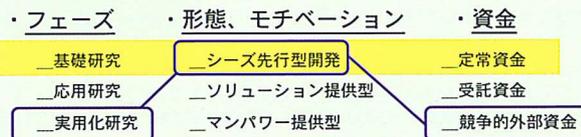
三井 ISITは大学とこれだけ付き合いが深いのであれば、ここの研究所で研究したものをベースにして、論文書くと単位がもらえるという仕組みは出来なのではないでしょうか。そうすると優秀ないい人材が集まるのではないのでしょうか。

村上 ISITで研究することでインターシップの単位取得になるのは一つのアイデアかも知れません。

三井 ISITのような大学以外のところで講座が成立して、学生が単位あるいは修士を取得できる。また企業からきた人にとっても学校に入っているのと同じように単位が取得できる話が日本でもだんだん出てきています。ISITもここまで大学の先生が出てきてやっているのであれば、そういう魅力的なことをやらないと、人的な質は上がらないのではないですか。

<第一研究室>

研究ビジネスモデル



村上 第一研究室の今後の方向性として、定常型研究はもちろん重要ですが、できる限り受託型研究よりもミッションドリブン(mission driven)型研究が重要と考えています。つまり、公的な競争的研究資金を獲得して、明確なゴール・目標・ミッションを持って研究できるような態勢に持っていきたいと思っています。受託型研究になりますとソリューションを提供する、あるいはマンパワーを提供するような研究になり、どうしても研究者のモチベーションが下がってしまう傾向にあると思います。



三井 信雄 氏

三井 プロジェクトが上手くいった場合には成功報酬が入ってくる、また上手くいかなかった場合には責任をとる。プロジェクトをそのような仕組みに出来ればモチベーションはもっと上がるし、若い研究者もより良い仕事をするとおもいます。

諏訪 ある分野に投資が必要だという同意があれば、現場の方がそれを有効に利用するように知恵を出す義務、責任があると思います。現場から責任ある提案を出す人が数多く出てこないといけないと思います。

村上 ミッションドリブン型で外部資金をとってきてやるからには研究員の数も増やせるように、そういう仕組みを作ることも必要だと思います。

<第三研究室>

松本 第三研究室には、中小企業と個別に連携して、ニッチな市場を狙った研究開発、より実用化研究の役割が期待されていると思っています。今は大学関係あるいは企業・各団体と協力関係、連携態勢ができてきて、積極的にパートナーとして一緒にやってくれる企業が増えてきていると考えています。

三井 ビジネスと開発・物作りという二つの側面があると思います。ビジネスの面として、これを商売にしていこうという情熱を燃やす人、これを売って行かなければという人がどこにいるかというのが非常に大事です。



長田 正氏

長田 製品化する際に最新のIT(情報技術)を駆使するのも大切ですが、ビジネスとしてやっていくためには、製品の大きさ、重さ、形状、あるいは値段をどうするかという、どちらかと言えば泥臭いところが非常に大切で、難しいところだと思います。この点は現場に入り込んだ研究開発が必要になると思いますが、その様な研究開発の積み重ねで売れるという確信に繋がっていくのではないのでしょうか。

松本 確かに実用化研究の進め方は難しいと認識しています。三菱財団から助成金を受けた視聴覚障害者の方々への支援システムの提案に基づいて、今年実証実験を行いました。その中の聴覚障害者に対する手話通訳サービスに対しては、ティスコジャパンという携帯電話レンタルおよび遠隔からの外国語通訳サービスを行っている会社が興味を持ちまして、来春からビジネスとして展開したいという話があります。視覚障害者に対する歩行支援サービスについてはなかなかビジネスになりづらい面があるので、どちらかという行政サービスとして展開できないかとその可能性を検討しています。

三井 歩行支援サービスは、土地感がないとわからないと思います。

松本 支援を受ける視覚障害者の方々にGPS機能のある端末を使ってもらえれば、支援をする人に周辺の情報を提供でき、よりの確な支援サービスができるようになると考えています。

今、我々としては進行中のプロジェクトを是非実用化できるようにしたい、またITを活用する新たなサービスの提案、普及を行っていきたくと考えています。そのようなことを実践していくには、定常型研究の技術レベルを保つ必要があると考えています。また、我々の所だけだと研究シーズも限られていますので、大学の先生方とも人的ネットワークを形成していかなければならないと考えています。

今回の研究顧問会議では、ISITのこれまでの活動と今後の展開に対し貴重なご意見、ご指導を頂くことが出来ました。これらのご意見を参考にすると共に、賛助会員をはじめ皆さまからご意見を頂く機会を設けて今後の中期的なISITの活動方針をまとめてまいります。

(財)京都高度技術研究所(ASTEM)との交流会

平成15年12月17日

今回の(財)京都高度技術研究所(ASTEM)との研究交流では、ISITから所長以下8名がASTEMに赴き、双方の活動状況報告とASTEMからデモンストレーションを受けた3件の研究発表があり、研究者による交流を深めることができました。

ASTEMでは平成15年10月に創立15周年を迎えられ、組織も総務部、産学連携事業部、研究開発部の三つを柱にして、新たな態勢でスタートされています。また、ISITも8周年を迎えて、今後の新たな展開を検討しています。組織の規模、研究開発の対象などに違いはありますが、事業化への取組などは共通する課題であり、今後も継続的な交流により貴重な情報交換を図っていきます。



ISIT新賛助会員

(平成15年10月以降)ご加入の会員

■法人会員

三栄ハイテック(株)

■個人会員

林 由紀夫



ISIT賛助会員一覧

(平成15年12月末現在)

■法人会員(67社)

アイクオーク(有)
 (株)アクセス
 (財)アジア太平洋センター
 (株)アルテート
 伊藤忠テクノサイエンス(株)
 (株)インターネットイニシアティブ
 (株)エクシズ
 (株)SRA西日本
 (株)エヌ・ティ・ティ・データ
 エヌ・ティ・ティ・リース(株)
 (株)FCCテクノ
 (株)エル・エス・アイ
 (株)オーニシ
 沖通信システム(株)
 (株)オリズン
 九州通信ネットワーク(株)
 九州電力(株)
 九州日本電気ソフトウェア(株)
 日本電気通信システム(株)
 九州ビジネス(株)
 九州旅客鉄道(株)
 (株)九電工
 ケア・ルートサービス(株)
 (株)コンピューター利用技術研究所
 西部瓦斯(株)
 三栄ハイテック(株)
 (株)サンコー・テクノ
 (株)シアスコム
 (株)昭和電気研究所
 (株)正興電機製作所
 ソニーグローバルソリューションズ(株)
 (株)ソーワコーポレーション
 テクノシステム(株)
 (株)東芝
 (株)ドミックスコーポレーション
 (株)西日本銀行
 (株)西日本高速印刷
 西日本鉄道(株)
 西日本電信電話(株)

(株)日経広告九州支社
 日本システムスタディ(株)
 日本電気(株)
 (株)野村総合研究所
 パナソニックコミュニケーションズ(株)
 (株)羽野製作所
 (株)ビーシーシー
 (株)日立製作所
 (株)日立超LSIシステムズ
 日立ハイブリットネットワーク(株)
 (株)ヒューコネクト
 (財)福岡観光コンベンションビューロー
 (株)福岡機器製作所
 (株)福岡銀行
 福岡コミュニティ放送(株)
 (株)福岡シティ銀行
 (株)福岡ソフトリサーチパーク
 (社)福岡貿易会
 福博総合印刷(株)
 富士通(株)
 富士通デバイス(株)
 富士通ネットワークテクノロジー(株)
 (株)マクニカ福岡オフィス
 松下電器産業(株)
 三菱電機(株)
 (株)三森屋
 (株)ロジカルプロダクト
 (株)ロジック・リサーチ

■個人会員(25名)

合庭 俊悟 飯田 武正 岡部 秀夫
 甲斐 康司 金丸 宗継 岸田 孝一
 木下 潔紀 桑山 雅行 小宮 宏道
 菟田 和人 是永 哲也 近藤 直史
 斎藤 建一 砂田 八郎 高倉 治雄
 伊達 博 張 漢明 月川 網雄
 津田 和範 中島 一隆 中村 敏宏
 橋本 淳 林 由紀夫 堀内 勉
 柳 善博



ご来訪の皆さま

平成15年12月31日現在 (敬称略)

貴重な情報交換、誠にありがとうございました。

平成15年10月以降の主なご来訪者[一覧]

10/03	日本電信電話アクセスサービスシステム研究所	5名
10/07	エヌ・ティ・ティ・インフラネット(株)	1名
10/09	(株)ナカヨ通信機	1名
10/14	文部科学省(科学技術政策研究所)	1名
10/17	EMC(電磁環境適合性)研究会	57名
10/21	SEMIジャパン	3名
10/28	エンジニアリング振興協会新産業研究部会	8名
11/04	インドネシア・ハサヌディン大学	4名
11/12	国際新華商会議in福岡	20名
11/14	茨城県商工労働部	3名
11/17	広州市政府科学技術局	10名
11/19	経済産業省(経済産業政策局)	10名
11/28	スタンフォード大学(Media X)	4名
12/03	文部科学省国費留学生(九産大留学生)	1名
12/15	ソウル大学	2名



新スタッフ紹介

(12月末現在、ISIT総勢50名)

所属 役職 氏名

事業部 部長代理 田中 久央

はじめまして、田中久央と申します。1月5日付で(株)西日本銀行よりISIT事業部へ着任いたしました。ISITはIT(情報技術)に関する研究開発の先端をいく機関で、いままでは営業店の現場一本で仕事をしてきた私にとって全くの未開の地であり、そんな中、時代はインターネットを中心にブロードバンド生活へと加速を強め、その時流に取り残された自分に何か得体の知れない焦りを感じるようになっていました。そんな折の職場環境の変化でありますので、ここで自分はいつたい何が出来るといふ不安をもつ一方で、時代の最先端をいく技術・研究に関わり自分自身を変えていきたいという意欲を感じました。



最先端を走る研究開発は、行政や大手企業の研究機関に依る一方で、数多くのベンチャー企業の努力により支えられていると言っても過言ではありません。しかしながらそれらの研究開発においては多くの人材や情報あるいは資金を要します。志半ばで研究を断念せざるをえないベンチャーも多いのではないのでしょうか。日本では行政や金融機関などのベンチャーに対する支援制度は残念ながら欧米ほど充実されておらず、今後は官民一体となつて取り組んでいかなくてはならない課題だと思います。私も当財団の仕事を通じ微力ながらそれらの命題を紐解く役割ができればと思っています。

●発行

財団法人九州システム情報技術研究所 ISIT

Institute of Systems & Information Technologies/KYUSHU

〒814-0001

福岡市早良区百道浜2丁目1-22-707(福岡SRPセンタービル(ももちキューブ)7F)

Fukuoka SRP Center Building (Momochi Cube) 7F 2-22, Momochihama, Sawara-ku,

Fukuoka City 814-0001

TEL 092-852-3450 FAX 092-852-3455

URL : http://www.isit.or.jp E-mail : koryu@isit.or.jp

印刷 : (株)ドミックスコーポレーション

